

2011年度

科目名	文化人類学B			
担当教員	坪井 恒彦			
配当	文 2・教育2・人間2		コード	15019
開期	後期	講時	月曜日5限	単位数 2
授業テーマ	考古学・民俗学の成果を援用し人類(日本人)の文化の祖型を考える(弥生文化から)。			
目的と概要	20世紀のアメリカで構築された「文化人類学」の理論・方法論は、日本地域にはそのまま当てはめられない側面を持っています。本講座では、文化人類学の目的を堅持しつつ、理論・方法論に日本の考古学・民俗学の考え方を取り入れ、「人間とは何か」を、彼らが創り出した文化、そして文明を通して追究していきます。そこには、私たちを取り巻く現代社会が抱える様々な課題を解きほぐす手がかりが隠されており、将来を見通す「眼」を養うヒントが秘められているのではないのでしょうか。			
成績評価法	平常点(30%)とレポート(70%)の内容について評価します。			
テキスト	自作のレジュメ集、資料のコピーを配布します。			
参考書	辰巳和弘著『新古代学の視点 「かたち」から考える日本の「こころ」』(小学館刊)。			
履修に当たっての注意・助言/準備学習	教壇から学生諸君への一方通行ではなく、諸君の意見・異論・提案・質問など、積極的な発言を求めます。			
講義計画				
1. 列島の「金属器文化」の特性 2. 「弥生環濠集落」の系譜 3. 水田稲作複合(システム)の影響 4. 「弥生神殿」文化の真相 5. 文化人類学から見た「弥生大型建物」 6. 弥生の司祭者「鳥装のシャーマン」 7. 「銅鐸文化」の実相 8. 「倭人争乱」の文化人類学的な解釈 9. 古墳時代の「導水祭祀文化」をめぐって 10. 古墳時代首長層の精神世界を探る 11. 遺跡から読み解く飛鳥人の思想 12. 飛鳥の「苑池文化」の国際性 13. 飛鳥京の宮殿文化を考える 14. 「日本語」の形成と普及 15. 総括				